

---

# ポステイノ

宮蒔 土靖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポストイーノ

### 【Nコード】

N4868Y

### 【作者名】

宮蒔 土靖

### 【あらすじ】

水の都・ベネディール。小舟を車代わりに人々は明るく陽気に暮らしている。そんな街を気に入り、一人越してきた売れない絵描きと、陽気な街とは反対に無口で無愛想な郵便配達員との交流の物語。現代の架空の街を舞台に、ゆっくりゆっくり互いを知っていく男女の物語です。

## 一日の始まり

朝の七時。東の空から顔をだした太陽のあたたかな光りをうけ、赤や黄色に塗られた外壁や、街の真ん中に流れるアルモ川がその水面をきらきらと輝かせている。

ここベネデイーレの街はアルモ川を中心に、そこからいくつにも枝分かれした小さな運河が張り巡らされた水の都である。バルケッタとよばれる小舟を列車や車代わりに利用して、人々は毎日を過ごしている。水の都なだけあって昔からこの街は、水は神様からの贈り物、命をあたえてくれるもの、として水を大切にしている。

気候は一年を通して温暖で、六月の終わりぐらいから気温が上昇し夏がはじまる。

建物はテラコッタに白を混ぜたような暖色系の色を中心としたものが多く、四角くそれでいて窓周りや外構にはアーチ状の曲線が用いられた造りのものが多い。

全体としても古く歴史を感じさせる趣のある街であり、観光地としてもよく人々が訪れる街であった。

「今日もいい天気だ。絶好の絵描き日和だな」

街を東西南北に分けた一つ、東に位置するエスト地区の小さな運河に面した住宅地の一角に、一人の男が立っていた。ここはベネデイーレの街のなかでも特に住宅が多く密集した静かな場所で、それは文字どおり細長いブロックのような家と家が密着したものである。

その中のひとつは最近まで空き家であった。けれど数日前からそこに一人の男が越してきたのである。男の名前はセレーノ・コルデイアーレといって、売れない絵描きであった。

「リエツラ、セレーノ。今日も絵を描きに行くの？」

隣家の二階の窓からふくよかな初老の女性が笑顔でセレーノに話しかけた。

「リエツラ、アローネ。まだ荷物が片付いていないんだ。昼までには片付けて、それから絵を描きに出かけるつもりだよ」

「そう。それは忙しい日になりそうね。朝ご飯はもう食べたの？まだなら一緒にどうかしら」

いいね、と笑顔でセレーノは答えたが、でも、と少し申し訳なさそうに頬を掻いた。

「朝食は毎日このベンチでとるって決めたんだ。ここからの眺めが好きなもんでね」

その応えにアローネはクスリと笑い、それはよかった、と言った。

「この街を気に入ってくれたみたいで嬉しいわ。ただ外で食べるのはけっこうですけど、その伸びたヒゲを剃ってからの方がいいわよ、セレーノ。みっともないわ」

セレーノは照れたように顎をさすり、慌てて洗面台に向かっていた。

ヒゲを剃ってさっぱりしたセレーノは、トマトとモツツアレラにハムとレタスをはさんで簡単につくったパニーニと、炭酸水のはいたボトルを持ってベンチに腰を降ろした。

このベンチはセレーノの家の前にだけ設置されていて、この地に

長く住んでいるアローネでさえ何故そこにだけあるのか分からないという。

けれどセレーノにとってベンチがあることはとても都合の良いことだった。なぜなら、ここからなら毎朝目の前に広がる運河をバルケッタにのって仕事に向かう人々を観察することができるし、通りを歩く人なんか「リエツラ」と陽気にセレーノに挨拶をしてくれるからだ。

そもそもセレーノがこの街に住むと決めた理由は、この街の人々の陽気さや船を利用して生活しているという、ちよつと変わった部分に魅力を感じたからである。

手を振る人たちに笑顔で振り返っていると、「リエツラ」とこの街ではめずらしく物静かな声で挨拶をされた。声のする方へ振り向けば、そこには自転車の籠いっぱいに手紙をつめた郵便配達員が立っていた。

「めずらしいな。この街には女性の郵便屋さんがいるんだね」

笑顔で目の前の女性に話しかけたのだが、相手は無表情のままセレーノの言葉を無視して、手に持っていた手紙をつきだした。

「セレーノ・コルディアーレさんですね。あなたに手紙が届いています」

「え！俺にかい！？もしかしてメーラからかい」

慌てて手紙を受け取り宛名を確認すると、セレーノはがっくりと肩を落とした。

「なんだ。お袋からか……」

そんな様子を横目に、郵便配達員は自転車に跨がりその場を立ち

去ろうとしたのだが、それをセレーノが呼び止める。

「待ってくれよ。どうだい、少し話してもしないか？」

郵便配達員は怪しむような目でセレーノを見ると、抑揚のない声で言った。

「あなたにはわたしが暇人に見えるのですか？あいにくわたしは多忙ですので、これで失礼します」

「ああ、ごめん。そんな風には思っていないよ。ただちよつとめずらしいなと思ったただだよ。この街には君みたいな女性の郵便屋さんが多いのかい？」

そう言いながら少し移動して、彼女が座れるようにベンチを空けた。仕方がないな、としぶしぶ郵便配達員はそこに腰を降ろし、セレーノの質問に答える。

「いいえ。女性の職員はごくわずかで、ほとんどが男性ですよ」

「へえ。じゃあ、数少ない女性職員に会えた俺は運が良いってことだね。ところで、仕事をするにはまだちよつと時間が早いんじゃないかい？それともこの街の郵便屋さんはみんな早起きで仕事熱心なのかな」

「いいえ、と彼女は首を振る。」

「仕事熱心なのはこの街の人みんなですし、早起きかどうかはその人の職によります。わたしの時間が早いのは、たんにわたしが勝手に早く仕事を始めているだけです」

「じゃあ、君が仕事熱心なんだね」

笑顔で愛想よく言ったのだが、郵便配達員はあいかわらずニコリともしない。

「たしかにわたしはこの仕事が嫌いではありませんが、このエスト地区を担当する職員がわたしを含めて二人だけです。そのくせこの地区は密集した住宅街ですから、届ける手紙も多いので、わたしは自主的に早く仕事を始めているのです」

そう言っつて席を立つと、本当にこれで失礼します、と言っつて籠いっぱいに入った手紙を配達するべく、自転車に跨がった。けれど彼女はすぐには動かず、ふと思いつ出したようにセレーノに尋ねた。

「ところで、コルディアーレさんは誰からかの手紙を待っているのですか？」

「ああ、恋人からのさ。この前引っ越したことを報せたんだけど、返事はこないみたいだ。まあ、今までだって一度も返事がきたことはないんだけどね」

そう照れたように頬を掻くセレーノにそうですかとお辞儀をして、郵便配達員はペダルを踏み込んだ。

「君、ここら辺の担当なんだろう？これからよろしくな！」

後ろ姿にそう呼びかけて、セレーノの新しい一日が始った。





## 「日の始まり」(後書き)

「リエッラ」とは、「ハロー」のような軽い挨拶です。

## 無愛想なポステイーノ

十二時を過ぎた頃、ようやく荷物をすべて片付け終わったセレーノは、キャンバスや絵の具などの必要な道具一式を持って、家から歩いて三十分もかからないパールへと昼食をすませに足をのばした。

「リエツラ、セレーノ。今日もお絵描きかい」

「リエツラ、ヴェント。そうだよ、ここで昼食をとってからね。君のおすすめのパニーニをたのむよ」

ヴェントはここ「グストーゾ」の主人で、よく日に焼けた肌を立て派な口髭、二の腕は太くとても逞しい体つきの壮年の男である。ただ少し強面なため、セレーノが初めてここを訪れた時どう声をかけていいものかしばし迷ったりもしたが、そんな見た目とは裏腹に本人はとても気さくな男である。

「どうだい、もうこの街には馴れたかい？」

「ああ、おかげさまでね。この街の人たちはみんな陽気で親切な人たちばかりだから、とても居心地がいいよ」

「そりゃあ、ここに住む奴らはみんなのんきな奴が多いだけさ。治安もいいし、観光地だからそれなり金廻りもいい。街としての心配事がないから、住人は自然と陽気にのんきに暮らすのさ。ほらできたぞ」

差し出されたパニーニを受け取りながらセレーノはふと今朝のことを思い出した。

「でもそうじゃない人もいるみたいだね。今朝女性の郵便屋さんに会ったんだけど、彼女はなんていうか、元気がない、というか無表情だったな」

それを聞いて誰のことかすぐピンときたのか、ヴェントはやれやれといったように首を振った。

「そいつはティコのことだろう。ここらのポステイーノっていったらアイツしかいないからな。ティコ・キアローロって言うんだが、飽きれちまうぐらいに愛想のない女でここらじゃ有名だ。前に観光客に道を尋ねられたときに、ちょっとは笑えばいいものを仏頂面でそっけなく答えるもんだから、相手もビビツちまってな。それを見かけた上司に注意されていたよ」

ヴェントは飽きたように続ける。

「あいつは昔からそうだな。俺もこの街に長いこと住んでるが、あいつの笑った顔なんて未だに見たことがないよ」

「それはある意味すごいことだな。けど、笑えば可愛いと思うんだけどな」

「おいおい、セレーノ。お前もしかしてティコに惚れちまったのか？ やめとけやめとけ、あんな女抱いたってつまらねえぞ」

予想もしていなかったヴェントの言葉に最後の一口だったパニーニをのどに詰まらせ、セレーノは慌ててコップいっぱいの水をいき飲んだ。

「そういう意味じゃないさ。誰だって笑った顔の方が良いだろう？それに、あいにく俺にはちゃんと恋人がいるんだ」

今度はヴェントが驚く番だった。セレーノの言葉に興味津々にカウンターから身を乗り出し、詳しく教えると迫ってきた。

「お前もちゃっかりしてるじゃねえか。それで、相手はどここの女だよ。美人さんか？写真とか持ってないのかよ」

「持つてるさ。いつも財布にいれてるからね。けど、あいにく見せるつもりはないよ。だって」

セレーノは席を立ち、カウンターに金を置いた。

「見せたら、ぜったい惚れちまうからな」

そういつて片目をつむってみせると、「ごちそうさま」と言っ店をあとにした。

## 橋の上の騒動

ヴェントの店から一番近い船着き場からバルケッタに乗り、セレーノはアルモ川との合流地点にあるこの街一番の船着き場に向かった。

そこは東西南北に張り巡らされた小運河がもつとも多く集まる所で、市場やその他の店も多く集まり、観光客や商人などで賑わう場所であった。ここらはほぼ街の中心地区であり、チェント口と呼ばれた。

バルケッタから降りると、セレーノは船着き場の隅の方に陣取り、絵の具を広げてそこで働く人々をキャンバスに写していった。

セレーノは人が好きだった。彼が描く絵のほとんどが人を中心に描かれたものであり、風景画はあまり描かなかった。

「リエツラ、メント。今日もいい天気だね」

ときどきそこで働いている人たちに話しかけながら、セレーノは日が暮れるまで夢中で絵を描きつづけた。

辺りが薄暗くなってきた頃、セレーノは家に帰るためにバルケッタに乗っていた。

「あれは……」

ふと目線を向けた目の前に架かる橋の上で、今まさにそこから飛び降りようとしている男性と、それを止めようと必死に掴み掛かっている女性の姿が見えた。よく見るとその女性は今朝出会った郵便配達員の女性である。

「放せ、放してくれ！これは自殺行為なんかじゃねえんだ。神を冒した奴らへの抗議なんだ！俺は死なねえ。あいつらが間違っていましたと頭を下げるまで、俺はぜったいに死なねえよ！」

「たとえ死ななくても危険な行為です！それにこんなことをしても状況は変わりません。とにかく一度頭を冷やしてください！」

その様子を見ていた船頭が驚いた声で言った。

「あれはチエレスティアーレ大聖堂のサントじゃないか！」

「知り合いかい？」

「ああ。もしかしてあいつ酒ひっかけてるな。ふだんは大人しい男なんだが、酒を飲んじまうとどうにも手がつけられなくなるんだよ」

そうこう言っているうちに橋の上のサントはどんどん熱くなっていく。

「よっく見ておけ、馬鹿野郎共！俺は抗議する。大聖堂を潰そうなんて、女神様を殺そうなんて、そんなことは馬鹿のすることだ！」

そう叫ぶと止める彼女を振り切って、サントは橋の上から身を投げた。と同時に、彼にしがみついていた彼女も引つ張られるように橋から落ちてしまった。

「危ない！」

そう叫んだ頃にはもう遅く、セレーノたちの目の前に鈍い音をたてながら大きな水しぶきをつくって、二人は暗く冷たい水の中へと消えていった。

「おい、大丈夫か！？どこだ、どこにいるんだ！」

なかなか浮いてこない二人をセレーノたちは必死になって探した。だいぶチェントロから離れた人通りの少ない場所とはいえ、その騒ぎを聞きつけた人々がどこからともなく現れてその場が騒然となる。

「まったく浮いてくる気配がない……。潜って探してくるよ」

セレーノはそう言って上着を脱いだ。

「待ちなよ、セレーノ。辺りもだいぶ暗くなってきた。これじゃ水に入ったって、暗くて中が見えないよ。警察がくるのを待ったほうがいい」

「そんなことを言って、二人にもしものことがあったらどうするんだ。警察なんて待ってられないよ！」

船頭の止める声を無視して飛び込もうとしたその時、二人のバルケッタから少し離れたところでサントを抱えた郵便配達員、ティコ・キアーロが水面から顔を出した。

「大丈夫か！こつちだ。今助けるからな」

セレーノたちは急いでバルケッタを側までよせると、ズブぬれで通常よりも重くなった二人を船へと引き上げる。

「サントさんは気を失っています！」

そう叫ぶとティコは仰向けに横たわるサントの口元に耳をあて呼吸を確認する。次に顎を上にあげて鼻をつまみ、自分の口をサントのそれに重ねて息を吹き込んだ。それから素早く心臓マッサージにうつる。

その行為を何度か続けていると、気を失っていたサントが口から水を吐き出し、低く力のない声で唸って目を開けた。

そうしている間にもバルケッタは陸まで漕がれて、目を覚ましたサントはその場に急いでやってきた仲間と思われる男たちに引き渡された。自然とその周りには黒山の垣が垣ができる。

「おい。大丈夫か、サント！」

「お前つて奴は、自分から飛び込んでおいて気を失うなんて、どれだけ間抜けなんだよ」

まったくだ、とサントを囲みながら、みんな安堵した表情を浮かべてその場は和やかな雰囲気包まれる。

「悪い、みんな。心配かけたよ。でもおかげで酔いは覚めたみたいだ」

咳き込みながらも謝るサントの言葉を聞いて、その場はどっと笑い声であふれた。



「そりゃあ、良かった！お前は飲むと手に負えないからな」

そんなサントの無事な姿を見て、セレーノはほつと息を吐く。

「よかった、無事で。それもこれも彼女のおかげだ……あれ？」

当然サントの命の恩人である郵便配達員の彼女も人の輪の中になると思っ探したのだが、まったく見当たらない。

不思議に思っセレーノは辺りを見回したのだが、すると少し離れた酒場の横で黙っこちらに背をむけてその場をあとにする彼女の姿が見えた。

水を吸っ重くなったであろう制帽を被り直して、酒場に止めていた自転車に跨がり、彼女は何も言わずに去っ行く。

その後ろ姿は、サントが助かって明るく和やかな雰囲気の人々とは反対に、どこか寂しいものに見えた。

「おい！ちよつと待っくれよ」

呼び止めようとするセレーノ。しかしその声は彼女に届かなかったのか、華奢なズブ濡れの背中はどうん小さくなり、あつという間に薄暗い闇の中に紛れて見えなくなっしまった。

その後ろ姿を黙っ見ていると、船頭が家の前まで送りますよと声をかけてきた。

「ありがとう。頼むよ、メント」

セレーノは船頭に礼を言っ、再びバルケッタに乗り込だ。

それを確認すると船頭は、誰が命の恩人なのかをサントに告げゆっくりと船を漕ぎはじめる。

(明日も彼女に会えるかな……)

彼女ともっと話しをしてみたい。

セレーノは彼女が姿を消した方角をじっと見つめていた。

## 大聖堂

その夜、セレーノはなかなか眠りにつくことができず、結局一睡もしていなかった。そのかわり毎日欠かさず書いている手紙を書き、完成間近だった絵を仕上げ、夜を過ごしていた。

朝は眠い目をこすりながら冷水で顔を洗いヒゲを剃り、軽い朝食をつくっていつものように家の前のベンチで道行く人々に手を振りながら食事をした。

もしかしたら今朝もあの郵便配達員が通るのではないかという思いから、朝食を食べ終わってもしばらくベンチに腰掛けていたのだが、来る気配がないことを知ると、数点の完成したキャンバスと無地の色紙と画材を持って出かけることにした。

今日はチェントロにあるチエレスティアーレ広場で絵を売りながら観光客の似顔絵を描くちよっとした商売をしに向かったのだが、その途中で乗っていたバルケッタを一度船着き場に止めてもらい、昨夜書いた手紙をポストに投函していった。

広場は相変わらず観光客で賑わっており、セレーノは三人の女神像が優雅に踊る噴水の前に店を広げたることにした。

ここチエレスティアーレ広場は、この街で一番古い聖堂であるチエレスティアーレ大聖堂が建つ場所であり、その前に立つ三美神の像が美しい噴水や、聖堂を囲むように左右に建てられた旧市街の建物があり、歴史を肌で感じる事ができるこの街の観光名所の一つである。

セレーノは折りたたみ式の簡易な椅子に腰掛け、ふと夕べのことを思い出した。

(そういえば、あの橋から飛び降りた人はこの大聖堂の人だって言ってたな……)

たしか大聖堂が云々叫んでいた。なにぶん酔って呂律の廻らない舌で叫んでいたものだから、セレーノにはよく理解できなかった。いったい彼は何を叫んでいたのだろうか……。

そんなことを考えていると、さっそく年配の老夫婦が旅の記念に似顔絵を描いてくれないかと言ってきたので、セレーノの思考はそこで中断した。

太陽が空高く位置する正午。セレーノはグストーゾでヴェントにつくってもらったパニーニを食べながら、ちよつとした昼休憩をとっていた。

午前中は老夫婦や家族連れなんかが似顔絵を求めにやってきたり、冷やかし半分に覗きにきた客なんかと楽しく話しをしながら過ごしていた。

そんななか興味深い話しを聞いた。正確には一人旅でこの街に訪れたという二十代半ばぐらいの青年がセレーノに尋ねてきたことなのだが、彼の話しによると近々このチェレスティアーレ大聖堂は改修工事がなされるというのだ。

本当かと尋ねれば、大聖堂の司祭とその知り合いらしき男がその件についてもめているところを見たという。

それを聞いてセレーノは一人納得した。タベ男が騒いでいたのはきつとこのことについてだろう。

たしかにこの聖堂はとても古く、今から二百年前に完成したものだという。しかも完成するまでに五百年はかかっているらしい。

この聖堂には当時の有名な彫刻家たちが施した彫像などもある。故にとても貴重な建造物であり、そして長い年月のためにところどころにガタがきている。改修工事をせざるをえない状況だとしても、それはやむをえないことだろう。

(聖堂の関係者ならそのことの重大さぐらいわかるだろうに……。なぜあの男はあんなことをしたのだろう?)

セレーノが再び思考の海のなかに潜ろうとしていた時、視界の隅で見覚えのあるポトルグリーンンの制服が見えた。それは今朝セレーノが待っていた郵便配達員のティコ・キアールであった。

「おーい！ 郵便屋さん。一緒にごはんでも食べないかい？」

会えたことが嬉しくておもわず大声で手を振ると、それに気がついたティコは恥ずかしそうに慌てて駆け寄ってきた。

「何なんですか、あなた！ 恥ずかしいからさういうことはやめてください」

相変わらずの無表情に少しかだけ怒りの表情を覗かせて、ティコはセレーノに注意した。

「ごめん。君に会いたかったものだからつい、ね。ティコも昼休み中かい？」

セレーノの言葉にティコは一瞬目を見開いた。

それからセレーノが商品の絵を置くために使っていた予備の椅子をすすめてきたので、迷いながらもそれに腰掛けた。

「そんなところです。それより、コルディアーレさんはピットオーレだったんですね」

セレーノの周りに置かれた絵を見ながらティコが言う。

「ピットオーレ？ああ、絵描きのことか。そうだよ。まあ、売れない画家だけだね」

それから、とセレーノが続ける。

「セレーノだ。俺の名前はセレーノ・コルディアレ。コルディアレさん、じゃなくて、セレーノって呼んでくれよ」

その言葉にティコは少し俯いて、セレーノの顔を見ずに尋ねた。

「……セレーノさんはなぜわたしの名前を知っているんですか？」  
「ヴェントから聞いたんだ。知ってるかい、グストーゾって店の主人なんだけど」

知っています、と頷くティコ。  
すると唐突に、ありがとうございます、と彼女は礼を言ってきた。

「夕べは橋から落ちたところを助けていただき、感謝しています」  
「それは違うよ。俺は君に感謝されるようなことは何もしていないさ。むしろ感謝されるべきは君の方だろう？あんなこと、なかなかできるもんじゃない」

「わたしは当然のことをしたまです。わたしじゃなくても、あの場にいれば誰だって同じことをしたでしょう」

「いや。やっぱり君はすごいよ」

けっして自慢したりすることのないその態度に、セレーノはただただ感心していた。それからふと思いついた、気になっていた例の件についてティコに訊いてみることにした。

「そういえばさっき聞いた話しなんだけど、このチエレスティアール大聖堂が近々改修工事がされるんだってね。もしかして、夕べの彼はそのことについて抗議していたのかい？」

「ええ、そうです」

ティコは後ろに聳え建つ厳かな雰囲気をもったチエレスティアール大聖堂を見上げて静かに言った。

「この大聖堂は古く歴史のある建造物です。歴史ある故に最近ではいたるところにヒビが入り、改修工事をする事になりました」

「でもそれって、やむをえないことだろう？なぜ彼は怒ってあんな無茶なことをしたんだろう」

「お酒を飲まれていたので多少大袈裟なことを言われていましたけど、一番は主祭壇に飾られた女神像にあるんです」

「どうことだと尋ねると、ティコはセレーノを振り返り淡々と事のあらましを話しました。

## 絵描きの失態

「一番被害が甚大なのは主祭壇の周りでした。それで改修工事をするためには女神像は一度別の場所に保管されることになったのですが、その周りを確認していた時、女神像の背面にも大きく深い傷があるのが見つかったんです」

ティコはふつと溜め息を吐いた。

「それだけならばまだ直しようがあったのですが、先月あった地震の影響で女神様の傷が深くなり、首が今にも落ちてしまいそうなまじになってしまいました」

「そんなに大きな地震だったのかい？」

「いいえ、とティコは首を振る。」

「幸いさほど大きな揺れではありませんでした。けれど、あれだけの揺れであも悲惨な姿になってしまったのは、それだけ女神像も古く脆くなっていたということなんだと思います」

そう話すティコの顔にはわずかながら悲しみの色が伺えた。

「女神像もそうですが、建物のいたるところで被害が拡大していて、早急な改修工事が求められるようになったのです。けれど女神様の像だけは取り壊して新しく作り直すことが決まったんです」

え、とセレーノは驚きの声をあげた。

「修理するんじゃない？駄目なのかい？女神像だって歴史的価値のある彫



像品の一つなんだろう」

「それだけ傷が大きいということですよ。それを綺麗に直せる人がこの国にはいませんし、本当なら腕のいい修復家を国外から呼べればいいのですが、その他の部分を直すだけでも相当な金額になります。それならば国外から人を呼ばず、国内にいる腕のいい彫刻家たちにできるだけ当時の姿に似せた女神像を新しくつくってもらう方が、金銭的にも得なんですよ」

そのために女神像を一度取り壊し、新しい女神像をつくる。でもそれは同じ姿をした女神像ではあっても、けして長い間この街で人々を見守ってきた女神像ではないのである。

「どんなに同じ姿をしていようと、一度壊してしまったものは二度とは戻らないんです。それはもう、まったくの別の代物なんです。サントさんはそのことを強く主張していました。なんとか国外から腕の立つ修復家を呼べないか、とも言っていました。サントさんにとって大聖堂だけでなく、女神様の像もとても大切な代物なんです」

セレーノはティコの真剣な眼差しを見て、彼女にとってもその像がとても大切な代物なんだということを感じた。

それでも彼女はまったく表情を変えずに淡々とした口調で話し続けているので、セレーノはついおかしなことを言ってしまった。

「パニーニ、て言うてごらん？」

「はい？」

予想もしていなかった言葉に、ティコは思わず目を丸くして聞き返す。

「だから、パニーニだよ。知ってるだろ？ほらこう、口角をキュッと上げて、パニーニ、と言ってごらんよ」

「わたしは真剣な話しをしているんですよ？しかもそちらから訊いてきたことなのに。それをパニーニだなんて、馬鹿にしているんですか？」

その顔にわずかに怒りの表情をにじませて、ティコは勢いよく席を立った。

「いや、違うよ。誤解だ。なんていうか、君の笑った顔を見たことがないなと思つて。それでつい、ね。気を悪くしたなら謝るよ」

「今わたしが何の話しをしていたか、あなたは聞いていましたか？聞いていたなら分かるでしょう、笑える話しなんかこれっぽっちもしていないということが！」

「悪かったよ。ことの重大さは理解できた。君もその女神像のことを大切に想っているということもね。なら、もっと悲しい顔をしたらどうだい？どうしてそんなに表情を、感情を隠そうとするんだよ」

その言葉にティコは一瞬傷ついたような表情を見せた。けれどすぐいつもの無表情に戻すと、じつとセレーノを見下ろした。被った制帽の影でよくは見えなかったが、その瞳はどんな深い海の底よりも暗く、冷たいものに見えた。

「たしかグストーゾの主人からわたしの名前を聞いたと言っていましたね。その時わたしのことを、無愛想で面白みもなくて、つまらない女だ、て言われたんじゃないですか？」

「そこまでは言われてないよ」

「そこまで、ですか。別に気になんてしていませんから、気遣いは無用です。それにもうけっこうです。あなたにこんな話しをしたわたしが間違っていました。仕事に戻るのでこれで失礼します。さよ

うなら、コルディアアーレさん」

最後まで感情を抑えた喋りで彼女はセレーノのに背中を向けると、止める声を見捨ててさっさとその場を去ってしまった。

「ちょっと待ってくれよ！俺が悪かった。話を聞いてくれよ」

こんなはずじゃなかったのに……。彼女の後ろ姿を見つめながら、セレーノは乱暴に髪をかきあげた。

## 後悔

あれから三日がたった。毎朝外で待っていてもティコ・キアローがセレーノの家の前を通ることはなかった。

この三日間、セレーノはずっと後悔していた。自分は彼女にとつて触れてほしくないことに触れてしまったようだ。

だいたいからして、彼女は真剣にこの街にとつても、彼女にとつても大切な物について話をしてくれたのだ。それなのに自分はそのことについてまったく真剣に答えてあげられなかった。

(どうしたら彼女に会えるだろう……)

せめてきちんと謝りたい。でも郵便局に行つても彼女は仕事で外出中だという。ならばエスト地区の担当なのだからと、半ば自棄になつて近所をぶらぶら歩いてみたりもしたのだけれど、けっきょく会うことはできなかった。

「ヴェント、俺はいつたいどうしたらいい？ どうしたら彼女に会つて謝ることができるんだろう」

夜。セレーノはグストーゾで一人寂しく酒を飲んでいた。

「おいおい、セレーノ。元気をだせて」

セレーノから話しを聞いたヴェントは、やれやれと溜め息を吐いた。

「そんなに気にすることじゃねえだろ。事実、お前が言ったことは本当のことなんだから。あのポステイーノだって、お前にズバリ言

われて少しは自分の性格を改めようって気になるんじゃないか？」  
「そんな言い方はないだろう、ヴェント。誰にだって人に言われたくないことぐらいあるさ。それに」  
「女神像のことか？」

ヴェントは吸っていたタバコを灰皿におしつけ、ふっと短く息を吐いた。

「その件については俺も人づてに話しは聞いていたよ。けどよ、セレーノ。これはもう決まっちゃった話しだぜ。誰にもどうにもできねえんだ。ましてやちよっと前にこの街にきたお前に何ができるって言うんだ？」

こんどはセレーノが深くため息を吐いた。

たしかにそうだ。セレーノだって、この街のことをまだよく知らない新参者がどうこう言える話ではないことぐらい、よくわかっているつもりだ。

(でも、もっと彼女に気の利いたことが言えたのではないか?)

そう思うとセレーノは居ても立ってもいられなくなるのだ。

「マジで元気だせよ。お前、本当にアイツに惚れちゃったんじゃないのか？そんなだとお前の彼女もらっちゃまうぜ」

「冗談はよしてくれよ……。頼むからかわないでくれ」

そう訴えるとセレーノはカウンターに力なく突っ伏して、今日何度目かの溜め息を吐いた。

そのとき、

「リエツラ、セレーノにヴェント」

セレーノの隣人、アローネが陽気な声で店に入ってきた。

彼女を見たヴェントは救いの女神だとばかりに彼女に助けを求めた。

「ちょうどいいところに来たぜ、アローネ。コイツをどうにかして  
ティコに会わせてやってくれよ」

カウンターに突っ伏しているセレーノを見て、アローネは心配そ  
うに声をかける。

「あらあらあら。めずらしいじゃない、セレーノが元気ないだなん  
て。どうかしたの？」

「話せば長くなるんだが、とにかくティコの居場所を知らないかい  
？」

弱々しい笑顔を見せるだけで、まったく理由を話そうとしないセ  
レーノに代わってヴェントがアローネに言う。

すると、なんだそんなことが、とばかりにアローネは彼女の居場  
所をあつさり教えてくれた。

「ティコ？彼女ならこの時間だとチェレスティアーレ大聖堂にいる  
はずよ」

その言葉にセレーノはガバリと起き上がり、まるでクリスマスにと  
っておきのプレゼントでももらった子供みたいに、その顔をキラ  
キラと輝かせた。

「それは本当かい、アローネ！」

「ええ。あの子、毎日この時間には必ずお祈りをしているはずだから、きつとそこにいるはずよ」

「ありがとう、アローネ！大好きだ」

ぎゅっとアローネを抱きしめて、セレーノは勢い良く店を飛び出していった。

その後ろ姿を見送りながら、アローネはポツと頬を赤く染めた。

「若い男に抱きしめられるなんて、何年ぶりかしら」

## デートのお誘い

バルケッタに飛び乗ったセレーノは、できるだけ急いでくれと船頭に言つて、チエレスティアーレ大聖堂へと向かつて行つた。

バルケッタが船着き場に着くと、船頭に短く礼を言つて、セレーノは勢い良く船を飛び出していく。

今は夜の十時前。リストランテなどの店の照明や街灯が照らす中、夜の街を観光客なんかがゆつたりと歩いている。そんな人々の間を突風にもなつたかのように、セレーノは石造りの通りを駆け抜けて行つた。

船着き場からさほど離れていないとはいえ、チエレスティアーレ大聖堂の前に着いた頃にはもう息が切れ切れで、額にはうっすら汗をかいていた。

「はあ……。こんなに、走つたのは、久しぶりだ。さすがに絵描きには、辛いな……」

もともと身体を動かすのが苦手な男である。また絵描きという職業柄、そうそう走ることもない。

足の力が抜けて立っていられなくなり、セレーノは大聖堂の扉の前に座り込んで、空を見上げながら弾む息を整える。今日は綺麗な満月だ。

輝く満月を見ていると、重厚な大聖堂の扉が開き、中からティコが姿を現した。

「あなたは……。こんな時間にそんな所に座り込んで、何をなさつてるんですか？」

扉を開けた真ん前でゼエゼエ息を切らした予想外の男がいる。ま



さかこんな時間に会うとは思わないので、不思議に思っ  
てティコは声をかけた。

「やあ、ティコ。今日は月が綺麗だね」

「……はい？」

何を言っているんですか、という顔のティコに、セレーノは慌てて訂正する。

「ああ、違う違う。俺の馬鹿。君に謝りに来たんだ」

「謝りに、て……、そのためにこんな時間にここまで来たんですか？」

そつだ、と頷くセレーノ。それを見てティコはあきれて言った。

「それはわざわざご苦労様です」

「いや、いいんだ。それより俺の話を聞いてくれ」

ふう、と一息を吐いて、セレーノはまっすぐティコを見る。

「この前は本当にすまなかった。君が大切な話しをしてくれたのに、俺は真面目に話しを聞かなかった。それに、君にとつて不快なことも言ってしまった。でも悪気があったわけじゃないんだ。お願いだ、どうか許してくれないか？」

必死に謝るセレーノに、ティコは変わらないポーカークフェイスでぼつりと尋ねた。

「本当にそんなことを言うただけに、ここまでやって来たんですか。……どうしてです？」

「どつして、て……」

額の汗を拭いながら、逆にセレーノは何故そんなことを訊くのかとばかりにティコに言った。

「そんなことじゃないだろう？ 君にとって大切なことだと思ったからだよ。それに誰かを傷つけておきながら平気で暮らしていけるほど、俺は大きな男じゃないんでね」

そうにつこり笑いながら言うセレーノを見て、ティコは胸がきゅつと掴まれたような、経験したことの無い不思議な気持ちがあった。

「……大丈夫です。別に気にしてなんていませんから。それに、思えばコルディアアーレさんはまだこの街に来たばかりなわけですし、そんな人がいきなりあんな話しを聞かされても、何を言っただいかわからないのが当たり前ですよ」

「いや、それは違うよ」

セレーノはティコの言葉に強く首を振る。

「女神像がなくなるのはやっぱり寂しいよ。俺も初めてこの街を訪れた時に一度、あの大聖堂の女神像を見たことがある。優しい眼差しでこつちを見ていたよ。それを見たとき、何も言葉が浮かばなかった。ただただ女神様に優しく抱きしめられているような、そんな気がしたんだ。不思議と心が満たされたよ。本当にあの女神像は美しかった」

セレーノは真剣な眼差しでティコに言う。

「きつとそれは、この街を訪れたすべての人が感じたことだと思う

んだ。女神像はこの街の人たちだけの物じゃない。だからやっぱり壊しちゃいけないんだよ」

その言葉を聞いたティコは素直に感動していた。

「ありがとうございます、コルディアーレさん。そう言ってもらえると嬉しいです」

「いや、礼を言われるほどじゃないよ。俺は思ったこと言っているだけさ」

照れたように笑うセレーノ。だが、ふと眉間に小さく皺を寄せた。

「もし俺のことを許してくれるのなら、コルディアーレさんじゃなく、セレーノって呼んでくれないか？」

「……セレーノさん、ですか？」

少し顔を下げたほのかに頬を染めながら、そのポーカーフェイスを崩してティコは恥ずかしそうに微笑んだ。

それを見たセレーノはやっぱり、と嬉しそうに笑った。

「俺の目は間違いじゃなかった。君は笑ったほうが可愛いよ」

その言葉に驚いたティコは、目を大きくして固まってしまった。

けれどすぐにいつもの無表情に戻すと、これまたいつもの抑揚のない淡々とした口調で言った。

「冗談はよしてください。もう遅いのでわたしはこれで失礼します」  
「あ、待ってくださいよ。お詫びに何かさせてくれないかい。そうだな、明日の夜は空いているかな？ よかったら美味しい物でもごちそうするよ」

ティコは少しの間どうしようかと考えた。けれど、なんだかんだで悪い人ではなさそうだし、なによりセレーノと食事ができることを嬉しいと感じていた。そんな自分に驚きながらも、

「八時過ぎなら」

と少し躊躇いがちに、小さな声でそう告げた。

「よし、わかった。じゃあ、八時半にここで待ち合わせだ。それまでどこかいい店を探しておくから、楽しみにしていてくれよ」

セレーノがまかせろ、とばかりに片目をつむってみせると、ティコは黙って頷き軽くお辞儀をして足早に大聖堂を去って行った。

その姿を見送って、セレーノは数十分前とはまったく違う晴れやかな気持ちで家に帰っていった。

## ヴェントのおすすめ

翌朝。三日間ろくに寝ていなかったせいか、目を覚ますと時計の針は昼の一時半をさしていた。

「やばい！ こんな時間だっ」

ベッド代わりのソファから飛び起きて、急いで顔を洗い、いつもの絵具のついた白いシャツに着替えて、髪の毛の寝癖も気にせずセレーノは家を飛び出して行った。

予定では今日はティコとのディナーのために、美味しいリストランテを探すはずであった。それなのにもう昼である。

セレーノはそんな自分に腹を立てつつ、とりあえず遅い朝食を食べるべくグストーゾへ向かった。

もちろん目的は朝食だけではない。ヴェントならばどこか美味しいリストランテを知っているかもしれないと思ったからだ。

「リエツラ、ヴェント！」

メニューを注文して、セレーノはさっそく昨夜のことをヴェントに話した。

「なんだ、セレーノ！ あの鉄のポスティーノをデートに誘ったのかよ？」

「デートじゃないさ。ただのお詫びの食事だよ。それでヴェント、どこか美味しいリストランテを知らないかい？」

「もちろん、美味しい飯屋ならたくさん知っているさ。まあ、この店もその一つなんだが……」

そう言いながらも、ヴェントはまだ信じられないといった顔でセレーノを見ている。

「おいおい、セレーノ。マジでティコに惚れてるんじゃないのか？  
どうするんだよ、恋人は」

「違うって言うてるだろ。ティコは友達なんだ」

「友達、ねえ。もしそうなら、お前はあいつの初めての友達ってことになるんだろうな」

ヴェントは腕を組んで、じつとセレーノの顔を見た。

「なんだよ、それ？」

「あの性格だぜ？ 人付き合いが良いとはお世辞にも言えねえだろ。第一、あいつが女友達と楽しく買い物とかしている所なんて、見たことねえよ」

「それは、ヴェントが知らないだけだろう」

「いや、とヴェントは首を振り、人差し指をビシッと立てて力強く言った。

「ぜったい、いねえよ」

あまりにも断定的に言うものだから、セレーノはティコのことが気の毒に思い、話題を変えた。

「話しがずれたよ。本題に戻そう」

ああ、そうだったな、とヴェントは再び腕を組んで考えた。

「俺が知っている限りでは、一つ、二つ……三つだな。この街には

たくさん美味しい飯屋があるけど、俺が気に入っているのはまずはペ  
エシエ・スパードっていう海鮮料理屋だ。次にティーモっていう飯  
屋。ここは店の裏で野菜を育てて、それを料理に使ってる。この二  
つはチェントロにあるぜ。あとは……あ！」

いきなりヴェントは大きな声をだし、ひらめいたとばかりに手の  
平をポンと打った。

「いかんいかん、忘れてたぜ。チェントロに一番おすすめの店があ  
るんだ。知りたいか？」

ニヤリと楽しいイタズラでも思いついた子供みたいな顔のヴェン  
ト。

もったいつけて教えてくれない彼に、セレーノはため息を吐きな  
がらも手を合わせて懇願した。

「どうか教えてください、ヴェント様！」

そんな姿に満足したのか、ヴェントはまだニヤニヤしながらも、  
セレーノに一押しのお店を教えてやった。

「そこまで言うなら仕方がねえ。少し見つけにくい店なんだが、名  
前をヴェネルディって言うんだ。料理ももちろんだが、店がアルモ  
川沿いにあって、窓から街頭で照らされた夜の川なんかが見えるも  
んだから、なかなか良い雰囲気だぜ。俺も女と行ったことがあるが、  
ロマンチックな光景に彼女もぼうつとしてたっけな」

その時のことでも思い出しているのか、ヴェントは遠くを懐かし  
そうに見つめている。

この蔵ついヴェントがそんなおしゃれ場所で食事をしたなんて…

…。  
セレーノは思わず吹き出しそうになったが、そこは必死でぐつとこらえた。けれど、それを敏感に察したヴェントはむっとした顔で、おい、とセレーノを睨んだ。

「ごめんごめん。ヴェントも意外とおしゃれさんなんだね。ああ、怒らないでくれよ。俺が悪かった。それで？　そこはけっこう人気の高い店なんだろう。今から予約しても間に合うかな？」

「それは、大丈夫だと思うぜ。なんとたつてティコが一緒なんだ……いや、深い意味はないぞ。とにかく予約なんて気にしなくて平気さ。ヴェネルデイならあのポステイノーだつてぜつたい満足するぜ。ほら、いま地図書いてやるから、これから下見にでも行ってこいよ。お前がリードして連れて行かなきゃならねえんだ。迷子になったら困るだろう？」

それからセレーノはいつものようにポストに手紙を投函し、チェントロにあるとういうヴェント一押しのお店、ヴェネルデイへと向かって行った。

地図はチェントロの船着き場から書かれており、チエレスティアーレ大聖堂の前を通って北へ矢印がのびている。

進むにつれて賑やかなチェントロの中心街から離れていき、途ややや細い路地や住宅街なんかを通ったりもした。

(本当にこんな所にあるのか?)

ヴェントにからかわれたのではないかと少し心配になってきた頃、近くで水の流れる音がした。

「もしかしてアルモ川か」



からかわれていたわけではなかった、と安心するとともに、地図に書かれたとおり目の前の角を右に曲がると、そこにはヴェネルデイと書かれた品の良い店が姿を現した。

ブロックを積んだような石造りの外壁。アーチを描くように木材でできた扉からは、日が傾いてきたためか、灯された店内の明かりがガラス窓から漏れていた。

「すてきな店だな……」

セレーノは思わず見とれてしまい、店の前にも関わらず、しばらく入り口の真ん前でぼうつとそれらを眺めていた。

するとカランという乾いた音とともに扉が開き、中から黒のスーツに蝶ネクタイをした、これまた品の良さそうな若い男が姿を現した。

「おや？ リエツラ、お客様。いかがなさいました。もしやご予約のお客様でございますか？」

現実に引き戻されたセレーノは慌てて男に言う。

「いや。予約はしてないんだ。ただ、知り合いにこの店はとても料理が美味しいと聞いてね。夜にでも友人と二で来てみようと思ったんだ」

そこでふとセレーノは考えた。ヴェントの言う通り、とても雰囲気の良い良さそうな店だ。ヴェントは大丈夫だと言っていたが、こんな人気の高そうな店が予約無しで利用できるはずがないのではないか。

そう思いセレーノは目の前の男、たぶんカメライーレだろう、に今夜の店の予約状況を尋ねてみることにした。

「今夜はもう予約でいっぱいかな？」  
「ええと……、少々おまちください」

そう言っつて胸のポケットから小さな黒革のノートを取り出し予約の状況を確認すると、若いカメラエーレは笑顔でセレーノに言った。

「いえ。お席の方はまだ若干空きがあるようです。ご予約なさいますか？」

やった、とセレーノは心の中でガッツポーズをした。

せっかく空きがあるんだ。これで予約せずに来て、席が埋まってしまいました、などと言われたら格好がつかない。セレーノは一つ頷き、予約するよ、と言った。

「ありがとうございます。それではお客様のお名前をお訊きしてもよろしいですか？」

「セレーノ・コルディアーレだ。あと、友人が一人。八時半過ぎには来るよ」

「コルディアーレ様とご友人様のお二人ですね。かしこまりました。それでは、心よりお待ちしております」

セレーノは丁寧な頭を下げるカメラエーレに軽く手を振って、今夜の準備のためにウキウキと来た道を引き返して行った。

## まさかの事態

「ほらほら。ボタンはちゃんと上まで締めた方がいいわよ、セレーノ」

夜の八時前。何を着ていこうか迷ったセレーノは、隣人であるアローネに服を見てもらっていた。正確には、今夜のことをヴェントから聞きつけたアローネが、自分も何かできないかしら、とセレーノの家に押し掛けてきたのだ。

「ほら、うちは娘ばかりだったから、セレーノが隣に越して来てくれた時は嬉しかったのよね。なんだか息子ができたみたいで」

そう言いながら着せ替え人形のようにどんどん服を着せていくアローネ。

そんな彼女に苦笑しつつも、セレーノはアローネのそんなおせっかいな性格が好きだった。

「そう言ってもらえて嬉しいけど、そろそろ出かけないと時間に間に合わないんだけどな」

「あら、もうそんな時間なの？ そうねえ……。じゃあ、この黒のスボンに、おろしたての真っ白なシャツ。それにこのジャケットが いいわね」

渡された服に急いで着替え、セレーノは鏡の前で髪をブラシで梳かす。

すべての身支度をすませ、どう？ とアローネに尋ねると、彼女はうっとりとした表情を浮かべて満足そうに言った。

「やっぱりセレーノはきちんと身だしなみを整えれば良い男よね。いつもはほつれたジーパンとか色あせたズボンなんかを穿いてるし、それにティーシャツかだらしなく着たワイシャツでしょ？ おまけに絵の具はついてるし……」

「それは汚れてもいいように、わざとそうしているんだよ」

あら、そうかしら？ とアローネは鼻でフンツと笑い、我が子を窘めるように言った。

「だったらせめてヒゲや髪の毛ぐらいはきちんとなさい。いつもヒゲはのびてるし、髪の毛だって寝癖がついていたのが一度や二度じゃないんですからね」

「ああ、わかつたわかつた。これからは気をつけるよ。さあ、もう出かける時間だから俺は行くよ。いろいろありがとう、アローネ」

これ以上アローネに怒られないうちに、セレーノはさっさと家を出て行った。

待ち合わせ場所であるチエレスティアーレ大聖堂の前まで来ると、そこにはすでにティコ・キアーロの姿が見えた。セレーノは片手を挙げて声をかける。

「やあ、おまたせ。まだ十分前なのに、早いね。仕事の方は大丈夫なのかい……わあ！」

目の前の彼女の姿を目にしたとたん、セレーノは驚いて思わず固まってしまった。

今日のティコは、アメリカンスリーブのショートドレスに、エナメル素材のハイヒールという出で立ちで、どちらも暗めのネイビー

カラーで合わせられており、落ち着いた印象だ。

ショートヘアの黒髪には、小さめの白い花の髪飾りがその頭の上で可憐に花開いている。

いつも生地硬そうな郵便配達員の制服で、頭のとっぺんから爪先まで身を固めているため、女性らしい姿の彼女を見るのはこれが初めてである。

「おかしいですか……?」

口をぽかんと開けたまま一言も発しないセレーノに、ティコは自分がおかしな格好をしてきてしまったのではないかと不安になった。

「いや、そんなことないさ。驚いたよ。いつも制服姿しか見ていなかったから、その、とてもきれいだよ」

目の前でもじもじと恥ずかしそうに俯くティコに、セレーノのモヤモヤ緊張しながらそっと手をさしだした。

「さあ、行こう。きっと君も気に入ってくれるリストランテを見つけたんだ。店自体は小さなものなんだけど、ヴェントのお墨付きだから味の方だっけと抜群だよ」

暖かなオレンジ色の街灯の下、チェントロの中心街から離れ、細い路地を通りながらセレーノはティコをヴェネルディへとつれていく。

道中、いろいろとティコに話しかけたのだが、不思議と彼女は足下を見たまま、そうですね、とか、そうでもないです、といったか

んじて、あまり返事をしてくれなかった。

(仕事で疲れているのかな……)

どうせなら彼女の休みの日に誘えばよかった、と気が利かない自分に心の中でそつと溜め息を吐いた。

会話があまりはずまないまま、気づけばあっという間に二人はヴェネルデイの前までやって来ていた。

「さあ、着いたよ。ここが美味しいと評判の店、ヴェネルデイだ！」

何はともあれ、これは彼女へのお詫びの食事である。今日はしっかりティコを楽しませなくては……。

そんなことを考えつつ、セレーノは笑顔で店の紹介をする。

しかし、ティコはハツと顔をあげて目の前の店を見ると、眉間に皺をよせて申し訳なそうな顔をした。

「あれ？　どうかしたのかい」

もしかしてこの店には来たくなかったのかと不安に思い、ティコの顔を覗き込むように尋ねたその時、

「お待ちしておりました、コルディアール様。あれ？」

カランという乾いた音ともに開いた扉から、昼間の若いカメラエーレが姿を現した。するとカメラエーレはセレーノの後ろに立つティコを見て驚きの声をあげた。

「おい、ティコじゃないか！　デートはもうすんだのかよ。さっき

出て行ったばかりだろう？ あ、わかつたぜ。からかわれたんだろ  
う。お前があまりにも愛想がない女だから、野郎どもに賭けのネタ  
にされたんだ。誰が先にお前を落とせるか、てな」

そう言いながら、さも楽しそうに笑うカメラエーレ。さっきまで  
の品の良い喋りはどこへ行ってしまったのか。

そんな男の百八十度変わった口調にもびっくりだが、この男とテ  
イコが知り合いだということにもセレーノは驚いた。

「おい、なに黙ってたんだよ？ まあ、お前が無口なのはいつものこ  
とか。それともシヨックで声が出ないのか？ なんなら、俺が慰め  
てやってもいいんだぜ。ただし、仕事が終わってからだけだな」  
「ちょ、ちょっと待ってくれよ」

尚も客であるセレーノの存在など無視してティコに話しかけるも  
のだから、セレーノはなにがなんだかわけがわからない。

「これはいったいどういうことなんだ？ 君たちは知り合いなのか」

たまらずカメラエーレの言葉を遮ってどういふことかとティコに  
尋ねると、彼女は申し訳なさそうにぼつりと呟いた。

「ここはわたしの家なんです」

## ヴェネルデイにて

「家……？」

セレーノは予想外の言葉にポカンと口を開けて、状況を整理しようとする前の二人を交互に見た。

それから二人に確認するように、もう一度開けっ放しの口から声をだす。

「ティコの家だって？ この店がかい？ 本当に？」

正にクエスチョンマークのパレードである。

混乱しているセレーノの問いにティコは黙って頷き、カメラエーレは、何度も訊くな、と半ば面倒くさそうに返事をした。

それを受けて、セレーノはがっくりと肩を落とした。

「間抜けだ……」

実はティコのことを喜ばせようと、昨日の夜からセレーノは張り切っていた。

家に帰るなり以前買ったベネデイーレのグルメ本を引っ張りだしてきて、何時間も夢中で読んでいた。

それでも迷ったので、最終的にはヴェントに頼ることにしたのである。

そのおかげで、素敵な店を見つけることができたので、これならティコも喜ぶだろう、と自信満々だったわけのだが、現実には彼女が店のことを知っているどころか、その店自体が実家だと言っただから、なんとも情けない話だ。



「恥ずかしいよ、俺……」

食事に誘っておいて、相手の実家に行く奴があるか……！  
そんなセレーノの姿を前に、ティコもやるせない気持ちでいっばいだ。

「あの、その……。すみません」

「いや、謝らないでくれ。君が悪いんじゃないんだから。俺がいけなかったんだ。ヴェントに聞いただけで、自分でよく調べもしなかった。完全に俺の調査不足さ……て」

言いかけて、セレーノはハツとした。

「ちよつと待て。ヴェントは知ってたはずだよな、ここがティコの家だって。ああ、嵌められた！」

くそつ、と声を荒げて、今になっては後の祭りだ。ヴェントへの仕返しは後で考えるとしよう。

セレーノはこれからどうしようかと、腕を組んだ。このままヴェネルディに入ったのでは、さすがにティコも面白くないのではないか。

そんな姿を見ていた若いカメラエーレが、面白そうにセレーノに声をかけてきた。

「いやいやいや。まさかティコのお相手がコルディアール様だったとは。コルディアール様は、ここがティコの家だと知らずにこいつをここへ食事に誘ったんですか？ ははっ。そいつは傑作だ！」

「オーリオ、いいから席に案内してください！」

腹を抱えて笑い出したカメリエーレは無表情でピシヤリと言うと、ティコはセレーノに向き直って、気にしないでください、と静かに言った。

「わたしはどこでもいいんです。食事に誘っていただけただけで嬉しいですから」

「でもここは、君の実家だろう？ 料理だって食べ馴れているんじゃない……」

「いいえ、大丈夫ですから。さあ、行きましょう」

それでもセレーノが躊躇っていると、そんなことなどおかまいなしに、カメリエーレがニヤリと笑って扉を開けた。

「さあさ、お二人さん。席は用意してございますよ。なんたってコルディーア様様がわざわざ予約してくださったんですからね！ まあ、どのみちティコが客でも予約してくれなきゃ、今日はいっぱいで他で食ってもらうことになっていましたけどね」

案内された席はアルモ川に面した窓際の席で、そこから夜の川を悠々と行くバルケッタが見えた。こちらに気づいた乗客なんかは笑顔で手を振ってくれる。

店内の雰囲気はというと、重厚感漂う外観とは違い、中は白を基調とした清潔感漂うもので、それでいてちょっととしたところに置かれた愛らしい木彫りの置物なんか懐かしい家庭的な雰囲気を感ぜさせた。

各テーブルの中央に置かれた蝋燭は、美しい彫り物がされたガラスの器に入れられており、ほんわりとした暖かい光りを放ってそれ

それぞれのテーブルを優しく照らしている。

そんな店内を居心地良く感じながらも、セレーノはやはり不安に思っていたことをティコに尋ねた。

「本当に良かったのかな？ 君にしてみれば馴染みの場所すぎて、その、正直がっかりしたんじゃないかな」

あまりにも申し訳なそうに言うものだから、ティコはそっと、優しい声音で言った。

「本当に気にしないでください。わたしも気にしていませんから。それに、わたしもいけなかったんです。はじめから自分の家がリストランテだと言っておかなかったものですから。でも、どこで食事をしたかなんて関係ありません。過ごした時間が重要だと思います」

ティコの言葉にセレーノは救われた思いがしたと同時に、前向きな気持ちになった。

「ありがとう。そうだね、過ごした時間が重要だよ。今日は君とたくさん話しをして、お互いを知るための有意義な時間にしよう！」

ちょうどその時、品の良さそうな年配の男性がセレーノに声をかけてきた。

「ヴェネルディにようこそ、コルディアール様」

見れば皺こそ寄ってはいるが、目元が先ほどのカメライーレとそっくりだ。

「わたくし、当店のソムリエをしております、ヴィーノ・ピアンコ

と申します。先ほどはわたくしめの倅が大変失礼なことを申しまして、まことに失礼いたしました」

そう言つてヴィーノはやや後退しはじめた頭部を見せるように、丁寧にお辞儀をした。

「いえ、気にしないでください。それにしてもとても素敵な店ですね、ビアンコさん」

「ありがとうございます。そう言つていただけると嬉しいかぎりでございます。ところで、セレーノ様にはうちのティコがお世話になつたみたいで」

「いえ、お世話だなんて。むしろ僕は彼女の勇敢さや寛大さを見習わなければなりませんよ」

「セレーノ様にそう言つていただけるとは。この子の親としてとても誇らしいですよ」

二人のやりとりに、ティコは密かに頬を赤らめた。

その後、食前酒に頼んだシャンパンを飲みながらメニューと睨めっこし、前菜にムール貝を炒めて蒸したものを、それからグリーンピースのリゾットなどを食べながら、ティコの仕事のことやセレーノの絵についての話しをした。

そんな二人のタイミングを見計らつて、ヴィーノの息子であるカリエーレのオーリオがメインディッシュを運んできた。

「こちら魚介類のミックスグリルになります。どうだい？　うちの店には満足してもらえたか、コルディアーレ様」

ティコの知り合いだとわかってからオーリオのセレーノへの態度は、おおよそ客をもてなすものとは思えないものになっていた。

「ああ、とても美味しいよ。それにここはなんだか居心地がいい店だ」

「そりゃあ、良かった。たいていの客もそう言って、次に来るときには友人なんかを大勢連れて来て自慢するんだ。どう？ わたし、こんな素敵な店を知っているのよってね。そうやって客が増えるのは良いんだが、こっちは家族三人と雇ってるシェフ一人だ。客が増えればその分、大忙しさ」

くるりと目玉を回して戯けてみせると、さっさと次のテーブルへと飛んで行ってしまった。

「なかなか陽気な人だね、君の……お兄さん、でいいのかな？」

大忙しのオーリオの背中を見ながら、先ほどから気になっていたことを躊躇いながらもティコに訊いてみることにした。

「いえ、兄ではありません。だいいち、わたしはこの家の者ではありませんから」

「え!？」

セレーノは思わず口の中のエビをのどに詰まらせた。

## ヴェネルディにて（後書き）

11/22・書き溜めているものが尽きそうなので、少々更新に間が空くと思いますが、お時間のある時にでもまたお立ち寄りください。

## 切ない痛み

驚きのあまり食べ物をもどに詰まらせ、セレーノは苦しそうに胸を叩きながら目につつすら涙を浮かべた。

それを見たティコは大丈夫ですか、とそっとセレーノのグラスにワインを足し、飲むように勧めた。

それからやってきた料理を口に運びつつ、ティコはいつものように表情をいっさい変えずに淡々と話しはじめる。

「気づいていらつしゃると思いますが、わたしはここに住んではいても、ビアンコさんたちの娘ではありません。拾っていただいたんです、赤ん坊の頃に」

いつきにワインを流しこんでのどを楽にしてから、セレーノはティコの言葉に答える。

「拾っていただいた、て……。たしかにあの二人はブロンドなのに君の髪は黒だし、二人への君の話し方にも違和感を感じたよ。それに、君はビアンコではなくキアーロと名乗っているから、おかしいとは思っていたよ」

「名前は拾っていただいたときに着ていたベビー服に刺繍されていたそうです。ご丁寧にフルネームです。ですから、ビアンコさんたちはそれを手がかりに必死で親を探してくれましたが、結局わからずじまいでした」

「でも名前以外で、他に何か手がかりになる様な物はなかったのかい？ 例えば目撃証言とか」

その問いかけにティコは食べる手を止め、口を閉ざしてしまった。きつとキアーロという名前意外他に手がかりはなかったのだろう。

セレーノは話題を変えることにした。

「ところで、君はどこで拾われたんだい」

「チエレスティアーレ大聖堂です」

ティコは再び手を動かしはじめる。

「二十四年前の七月。暑くて眠れない夜に、偶然翌日の開店祈願にやって来たビアンコさんたちに発見されました。その時わたしはあの女神様の真下で、独りぐっすり眠っていたそうです」

「独り、か……」

あのただっ広い大聖堂の中、生まれて間もない小さな赤ん坊が独りで眠っていたなんてあまりにも可哀想ではないか。

そんな赤ん坊の姿を想像すると、さつきとは別の意味で食べ物のどを通らない。

そんなセレーノの気持ちを察したのか、ティコはきっぱりとセレーノに言った。

「そんな顔をしないでください。だいいち顔も覚えていない人のことなんて今さら何とも思いません」

相変わらず淡々と、むしろそんなことに興味はない、とばかりに無表情のまま黙々とティコは食事を続ける。

「本当に？」

そんなティコに納得がいかないとばかりに、眉間に深い一本線をいれてセレーノは訊いた。



「本当に何も思っていないのかい？ 怒っても、憎んでも、ましてや会いたいとも思っていないのかい？」

「特に興味はありません。今まで親などいないと思って生きて来たのですから」

真つ直ぐ見つめてくるセレーノに、ティコもその手を止めて、正面からじつと彼の目を見据えた。

「これからだってそうです。わたしに親なんていませんし、いりません」

「でも」

尚もセレーノが何か言おうとした時、もういいですか、とティコがそれを遮った。

「わたしについてこれ以上楽しい話しはありません。少し喋り疲れたので、次はセレーノさんのことを話してください」

これ以上自分について話す気もないし聞く気もない、とばかりに視線を自分の皿に戻し、再び目の前の料理を口に運びはじめた。

その様子を見て、セレーノは仕方がないとばかりにため息を吐いて、自分がなぜこの街に来たのかを話すことにした。

「俺がこの街に初めて来たのは去年の六月だった。ちょうどこの街では年に一度の水謝祭の日だったよ」

「この街では六月が夏の始まりですからね。もう少しすればまた水謝祭の時期になります」

「ああ、そうだね。水謝祭は水をよく使う夏に向けて、先に水の女神様へ感謝の気持ちを込めて街中に水をまく感謝の祭りだよね。そして人々も互いにかけ合って、女神様の力を少しでも貰おうとする。

観光客だろうとおかまいなしにみんなでかけ合うんだよね。俺もおもいつきりかけられたよ」

当時を思い出してクスリと笑うセレーノ。

「テレビカメラも何台か来ていて、凄い盛り上がりだった。楽しかったな。街の人も凄く親しみやすくてさ。それで次はこの街に住もうって決めたんだ」

それからグラスにワインをそそいでゆっくりと回し、当時を懐かしむようにセレーノは話しを続ける。

「知つての通り、俺は絵描きだ。昔から人を描くのが好きで、世界中の人をキャンバスに描きたくていろいろな国を転々としているって、さつき言ったよね」

黙って頷くティコ。

「そんな生活がもう十年は続いている。この街に来る前は東方の国で絵を描いていたんだけど、ある日知人からこの街のことを聞いてね。それで興味をもって去年やって来て、ここに住むことを決めたけれど、前の国で大きな作品の制作途中でね。結局周辺の整理やら何やらで、ここに来るのが一年も先に延びてしまったわけさ」

セレーノはワインを一口飲んだ。

黙って聞いていたティコは、手を止めて、感心したようにぼつりと言った。

「十年もいろいろな国を渡り歩いているなんて、凄いですね」

「凄くなんてないさ。俺は自分勝手に生きていただけだよ。その証

拠に、故郷の島に十年も恋人を置き去りにしたままさ」

セレーノは懐かしい島の風景と、愛しい恋人の顔を思い出しながら、はは、と力なく笑った。

「俺の故郷は本当に小さな島国で、海の上にぽつんと漂っているみたいだった。気候もどちらかというとこの街に似ていたかな。雨もめったに降らないし、真夏でも安定した島風のおかげでそれなりに過ごしやすい島だった。空気もきれいで、海は絵の具で塗ったみたいに真っ青だった。島の建物はどこもかしこも白くて、どこを切り取っても絵になる島だった。でも、それだけさ」

ふう、と長いため息を吐いて、セレーノはしばらく口を閉じた。それからまたゆっくりと話しはじめる。

「俺は嫌になつたんだ。生まれてから二十年近くあの島に住んでいたけど、俺にはあの島の時間はいつも止まったままに感じられた。観光客もそれなりに訪れていたから、彼らを相手に島の絵を描いて生活していたけれど、俺にはどうしてもあの島は世界から忘れられた島にしか思えなくて、毎日ただ何となく過ごしていた。けれど、そんな退屈な毎日の一つだけ楽しい時間があった」

「……恋人という時ですか？」

ティコの問いにそうだとセレーノが頷く。

それから財布をとりだして、中から一枚の写真を見せてくれた。そこにはどこまでも青い海を背景に、こちらに向かって優しく微笑んでいる女性の姿が写っていた。髪は癖のないストレートヘアで、少しそばかすのある顔がなんと愛らしかった。

「メーラ、ていうんだ。俺より四つ年下だったけど、すっかりした

女の子だったよ。それでいて強い子だった。俺が島を出るって決めた時も、いつさい引き止めなかった。いつ戻ってくるかもわからないのにけっして涙も見せず、むしろ行ってこい、て怒られたよ」

写真の向こう側で微笑む恋人を見つめながら、セレーノは優しく微笑んだ。

「だから俺は決めたんだ。会えない代わりに毎日欠かさず手紙を送ろうってね。けれどメーラからは一度も返事が来たことはないんだ」「十年も毎日欠かさず送りつづけているのにですか？」

不思議そうに首を傾げるティコ。  
セレーノは困ったように微笑みながら、さあね、と言った。

「理由はわからないけど、何となく予想はつくよ。行ってこい、とは言ってくれたけど、たぶん本当はそう思っていなかったんだろうね。俺の我が侂を許すかわりに、彼女は俺にいつさい返事をしないつもりなのかもしれない。大人しそうに見えて、けっこう気が強かったから、メーラは」

恋人との楽しかったひとときでも思い出しているのか、その顔にひどく優しい笑顔を浮かべて話すセレーノを見て、よほど恋人のことを大切に思っているんだろうな、とティコは感じた。

(彼女が羨ましい……)

気がつけば写真の向こう側の女性に嫉妬している自分がいた。そんな自分に戸惑いながらも、目の前で彼女の話しをしているセレーノを見ると、なんだか切ない痛みを感じてしまう。

(わたしはいつたいたどうしたのだろう……)

「大丈夫？　なんだか具合が悪そうに見えるけど」

ハツと顔をあげればセレーノが心配そうにティコを見つめている。

「いえ、ちょっと食べ物かのどに詰まっただけですから」

もう大丈夫です、と言うティコに、それなら良いのだけれどとセレーノは安心したように笑い、再び故郷について話しはじめた。

けれどセレーノがその話しをするたびに、ティコの胸はなぜだかチクチクと切ない痛みを増していく一方だった。

ありえない

その後もセレーノとティコはたわいない話しをしながら（とはいえほとんどセレーノの話しにティコが相づち打つ形ではあったが）二人はゆっくり食事を楽しんだ。

途中、今日誕生日を迎えるという五歳の少女のサプライズケーキの登場とともに、店に来ていた客全員でバスデーソングを歌うという微笑ましいイベントもあつたりと、気がつけばあつという間に時間は過ぎて閉店間近となっていた。

「いやあ、本当に美味しかったよ。それに君とたくさん話しもできたし、すごく楽しかった」

石畳の道を街灯がオレンジ色に照らす中、店の前ではセレーノが満足そうな笑顔でティコに話しかけていた。

「そう言っていただければ、きっとピアノコ夫妻も喜びます。それにわたしこそ誘っていただけで感謝しています。本当にありがとうございました。よろしければ途中まで送りますよ」

そう言つて歩き出そうとするティコを、セレーノは慌てて腕を掴んで呼び止める。

「いや、大丈夫だよ。それにもう暗いんだから君は家に入った方がいい。俺は男だから平気だけど、君は女の子なんだから。俺と別れた後に何かあつても困るからね」

「大丈夫です。これでも護身術を身につけているので、自分の身ぐらい自分で守れますから」

「それでもダメだ」

セレーノは力強く首を振ってティコの身体をくるりと反転させると、家に戻るように背中を押しした。

「君が家に入るのを見届けたら、俺は帰ることにするよ。ほら、いから行って」

そう言われてはティコもしぶしぶ扉を開けて家に入るしかない。けれど、やはり気になって少しだけドアの隙間から顔を出し、セレーノの様子を窺った。

それを見たセレーノは笑顔でじゃあまた、と手を挙げるとヴェネルディをあとにした。

遠のいていく男の後ろ姿を見送って、ティコは静かに溜め息を吐いた。

「よう、ティコ。どうした、溜め息なんか吐いて。もしかして恋煩いかい？」

店の後片付け中なのか、片手にモップを持ったオーリオがニヤニヤと笑いながら声をかけてきた。

「そんなんじゃないやありません。着替えてしまいたいのでそこをどいてください」

「なんだよ。相変わらずつれない女だな」

つまらなさそうに口を尖らせるオーリオを無視して、ティコは店の三階にある自分の部屋へと行ってしまった。

その姿を見ていたヴェネルディのシェフで、オーリオの母、ティ

「コにとっては育ての母でもあるペペ・ピアンコが、どこか逃げるように去った娘の背中を見送りながらそつと息子に囁いた。

「あの子、ひよつとして本当に恋してるのかもしれないわね」

「ええ！ 何言ってるんだよ、母さん！ ティコが恋なんかするわけないだろう」

「あら？ あんただってさっきティコに訊いてたじゃない、恋煩いか、て」

「あれはちよつとからかったただけだろう。ティコが恋とかするわけないさ。ましてやティコが嫁になんていくわけないんだ！」

そう叫ぶとオーリオはモップを放り投げ、階段を駆け上がって同じく三階の自室へと消えてしまった。

「嫁って……。私はそこまで言っていないわよ」

啞然と走り去る息子の背中を見送るペペに、奥で会話を聞いていた夫のビーノがやって来てその肩にそつと手を置いた。

「母さん、察してやってくれ。オーリオの気持ちを」

「何よ、それ？」

ペペは何がなんだかわからない、と首を傾げるのだった。

「はあ……」

脱いだドレスをハンガーにかけて、ティコはそのままベッドへうつ伏せに倒れ込んだ。

ふと見上げれば窓際に置かれたベッドから夜空に輝く月が見える。

(なんだかとても疲れたな……)



別にセレーノのことが嫌いなわけではないのだが、けれど彼といるとなんだか落ち着かないのだ。妙に緊張してしまう。

とはいえ、もともとティコは感情を表に出すような人間ではないため、自分といるとティコが緊張して疲れているなど、セレーノは微塵も思っていないだろう。

「いったいどうしたんだろう」

はあ、とティコは今日何度目かの溜め息を吐いた。

このままこのモヤモヤした気持ちが続くとなるとさすがに困る。

『もしかして恋煩いかい？』

その時先程のオーリオの言葉が頭をよぎった。

「まさか。そんなことありえない……」

自分が誰かに恋をするなんてありえない。ましてや既に恋人がいる男に恋をするだなんて非常識である。

だいたいティコのセレーノに対しての第一印象はあまり良いものとは言えなかった。

はじめて彼を見た時、彼はのんきに家の前のベンチに座ってパニーニを食べながら船で道行く人々に手を振っていた。

明るい長めの金髪は無造作にゴムで括られていて、着ているものも絵具の付いた白のワイシャツにくたびれたジーンズ。それに足下はサンダルだ。それだけでどんなゆるい生活をしているのかが窺える。

それに極めつけはあの顔だ。終始ニコニコ笑っていて、誰にでも話しかける。まるで随分長いことこの街に住んでいるようにだ。

(なんて悩み事のなさそうな、平和ボケした顔だろう)

人によっては愛想があつて良いという人もいるのだろうが、ティコにとってはどうしても胡散臭い男にしか見えなかった。

しかし今は違う。

たしかに一度は腹を立てたこともあつたが、彼と話してみれば実際のところ実に良い人である。

夕べだつて、わざわざあんな時間に謝りにこなくてもよさそうなものを、彼は走つて会いに来てくれた。それに「そんなこと」と言つた自分の言葉を否定して、「大切なことだ」と言つてくれたのである。

そういつたことから、ティコはセレーノという人物が誠実な人なんだと考えを改めた。

だからといって、そんなことで自分は簡単に恋をしてしまうものなのだろうか？

(ありえない……)

ティコは仰向けに転がり、否定するように頭を振つた。

けれどいくら頭を振つても、あの男の笑つた顔がまるで張り付いてしまったかの様に頭の中から消えてくれない。

(こんな思いをするなんて……。やっぱりセレーノさんなんて嫌いだ)

そんなことを思つても、このなんとも言えないモヤモヤとした気持ちは自分の頭の中をいつぱいにして消えないのだ。

もうどうしたらいいかわからなくなったティコは、おもむろに腕

を伸ばしてベッドの隣にある机の引き出しを開けて、中から一通の手紙を取り出した。

そして流れる様な美しい字で書かれた名前をじっと見つめて、ぽつりと呟いた。

「じついつ時、母<sup>あなた</sup>なら何と書いてくれるのでしょぅ……。」

## 女神の首と小さなプリンセス

午前十時を過ぎた頃。セレーノは期待半分緊張半分というやや複雑な気持ちで、人の行き交うチエントロを大きなキャンバスと画材一式を持って歩いていった。

今日のセレーノはいつもより一時間も早く起きて、綺麗にヒゲを剃り、ぼさぼさの髪をいつもより丁寧に梳かしてきちんと一つに結い上げていた。

(久しぶりのお客さんだ……。頑張らないとな)

セレーノが今向かっているのは、チエントロにあるペエシエ・スパーダというヴェントもおすすめの海鮮料理屋である。そのオーナーの孫娘が近々記念すべき十歳の誕生日を迎えるとかで、是非とも店に飾れるような立派な肖像画を描いて欲しいという依頼がきたからだった。

そのことをヴェントに話すと、

「はは！ あそこのジジイのやりそうなことだ！ 経営者としては確かなんだが、とにかく孫に甘々なんだよ。孫に、大きくなったらジイジと結婚するの、て言われたことを本気にしてるぐらいなんだから、救いようがないよ」

と、笑い転げていた。

まあ、セレーノにしてみれば久しぶりのきちんとした仕事だ。孫命のおじいさんだろうと、大切なお客様に変わりはない。

この街に来てからというもの、セレーノはこういった本来の絵描きらしい仕事は初めてだった。

最近では観光客相手だけではなかなか生活していけないので、時

々ヴェントの店を手伝いながら画廊などを巡って、描いた絵を置かしてもらっている。そんな状況のため、今のセレーノにとっては絵を注文してくれるのならどんな人だって大歓迎なのだ。

ただこのオーナーは、孫以外にはとても厳しい人らしく、家族だろつが客だろつが自分の気に入らないことがあれば火山が爆発したかのごとく顔を真っ赤にして怒鳴りちらすという。時間に遅れようものならば、うちの孫娘が待ちくたびれてしまっただろつが、このクソガキがっ！と言われるのは確実だとヴェントが言っていた。

「よし。これなら約束の十一時には間に合いそうだ。さすがにこの年でガキとは言われたくないからな……」

セレーノは普段めつたにしない腕時計で時間を確認して、少し安心しつつも急ぎ足で依頼主の店に向かっていった。

するとその時、

「おい、聞いたかよ。大聖堂の女神像の首がついにぽっきりいつちまったらしいぜ」

という話し声が聞こえてきた。

「え？」

思わず立ち止まるセレーノ。見ればちょうどチエレスティアーレ広場の前まで来ていた。

いったいどういふことかと耳をすますと、すれ違う人々が口々に話している声が聞こえてくる。

「ほら。この前、軽い地震があったらろつ？ それでついにやられちまっただだつてよ」

「おいおい。それじゃあ余計に反対派と賛成が揉めるんじゃないのか？」

「けど大聖堂の改修工事も女神像の取り壊しも、もうとっくに決まったことなんじゃないのかよ？ 今更揉めるも何もないだろうに」

「馬鹿だな、お前。決まったも何も、あれは街の代表が強引に改修工事と女神像の取り壊しを押し切ったのが悪いんだろうが。大聖堂の改修工事は仕方がないとしても、女神像の取り壊しだけは反対派としては何とかしたいんだよ。それで、邪魔してでも工事の開始を先延ばしにしてるみたいだぜ」

そう話しながら二人の男がセレーノの前を通り過ぎて行く。

「嘘だろ……」

居ても立ってもいらなくなったセレーノは、約束のことなんかすっかり頭からすっ飛ばして、急いで大聖堂へ走って行った。

バサバサとたくさんの鳩が空高く飛び立つ中、セレーノが大聖堂の前に着くとその重い扉が開き、中から神父を挟むようにして何時ぞやの橋の上の男と、小柄で眼鏡をかけた男が激しい口論をしながら姿を現した。

「だから言ったんです。早く決断しないからこういう事態になるんですよ。サント、君の気持ちはわかるが、あの女神像の悲惨な姿を見ただろう？ もう取り壊すしかないんだよ」

「神父様、テオの言葉なんか聞かなくてけっこうですよ。テオ、君は取り壊すことの意味がわかっていないから、そんな酷いことが言えるんだ！」

間に挟まれた神父は、口を真一文字に結んで難しそうな顔をしたまま、何も言わない。それを良いことに二人の会話はどんどん熱く

なり、そのまま三人はどこかへ行ってしまった。

そんな三人をよそに、セレーノは急いで扉を押し開けて、主祭壇の後ろに飾られた大きな女神像の前まで走って行く。

しかし大聖堂のひんやりとした空気の中、女神像はその身をすっぽりと大きな白い布で隠し、その姿を見ることはできなかった。

見れば頭一つ分小さく見える。本来ならそこには女神の美しい顔があるのだろうが、今ではそれが過去のことだということが布越しでも見て取れた。

「ああ。本当なのか……」

セレーノは鈍い音を響かせながら持っていた荷物を床に落とし、ただただ目の前の光景に呆然としていた。

(ティコはもうこのことを知っているのかな……)

彼女にとって女神像はある意味思い出の場所だ。それがどいういった思いのものなのかセレーノには計り知れないが、それでもこの大聖堂の話しをしてくれた時の彼女からは、何か特別な思いを抱いていることは感じ取れた。

そんなことを考えていると、どこからかすすり泣くような小さな声が聞こえてきた。

(なんだ？ 誰かの泣いているのか)

大聖堂の中にはセレーノの他に数人の観光客がいたのだが、けれど別に誰も泣いている様子はない。

不思議に思っただけで声のする方へ近づいてみると、祭壇の後ろで足を抱えるようにして座っている小さな女の子を見つけた。

「どづしたんだい、こんな所で」

膝に顔を埋めるようにして肩を震わせている女の子に、セレーノはそっと声をかける。

「どづして泣いているのかな？ パパとママはどこだい」

優しく頭を撫でながら、セレーノは目の前の女の子を観察する。見た限り年は五歳ぐらいだろうか。長い柔らかな髪はゆるく巻いており、頭にはキラキラ輝くティアラをのせている。服は小さな花模様があしらわれたドレスの様なピンクのワンピースで、高さ二センチぐらいのヒールのあるサンダルを履いていた。

(なんか、高そうな服を着ているな……)

文字通り頭のとっぺんから爪先まで高そうな物で身を包んでいる少女は、あきらかにどこぞのセレブの娘であることが伺える。

(この年の子にこんな高そうな服を着せるなんて、よっぽど溺愛しているんだろうな……)

などと半ば呆れながらも、セレーノは女の子に再び声をかけた。

「もしかして一人なのかな？ 迷子かい？」

「ちがうわ」

舌つたらずな喋り方で、女の子はようやく顔を上げてセレーノに言った。

「ローザにはパパなんていないの。ママだっていないわ。ローザは



ひとりぼっちなの」

「え。どういう意味なんだい。それは迷子ってことじゃないのかな？」

「ちーがーうーの、パパもママもないのー！」

再び泣き出す女の子。今度は大聖堂中に響くような大きな声で泣き出すものだから、セレーノは慌てて女の子に謝った。

「ああ、ごめんごめん。わかったから、泣かないでくれよ」

セレーノは女の子を抱き上げて、よしよしと背中をさすってやる。それから優しく、

「さあ、泣かないでプリンセス。君の名前は何ていうのかな？」

と尋ねると、顔中を涙で濡らしていた女の子は泣くのを止めて、不機嫌に言った。

「あなた、失礼よ。人に名前を尋ねる時は、まず自分から名乗るものなのよ」

その答えにはさすがにセレーノも驚いた。一瞬、生意気だな、と思ったがそこは口に出さない。

降ろせとばかりに足をバタバタさせる女の子を降ろして、セレーノは目線を合わせるようにかがむと、うやうやしく彼女に頭を下げた。

「これは失礼いたしました、プリンセス。俺の……いや、私めの名はセレーノ・コルディアールと申します。プリンセスにお目にかかれて光栄でございます」

すると女の子がすつと手の甲を突き出して来たので、セレーノはそれに優しくキスをした。

その時、

「何をやっているんですか、こんな所で」

久しぶりに聞く彼女の声でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4868y/>

---

ポスティーノ

2011年12月10日01時54分発行